

佳作

終わらざる夏

森田 たもつ

登場人物

仲宗根淳栄（宮古警察刑事）

ヨネ（市場のポーポー売り）

昭一（ヨネの息子）

トーマス・ミウラ大尉（中佐の副官）

カール中佐（宮古民政府長）

大杉夢子（中佐のハーニー）

上里課長（宮古警察刑事課長）

豊村署長（宮古警察署長）

国民学校長

訓導

警官 A

警官 B

1

宮古民政府長執務室。

舞台右半分に照明。左半分は暗い。

右の中央にデスク。

カール中佐がその前を忙しなく行き来している。イスに座り電話の受話器を取る。

カール中佐 トム、ちよつと来てくれ。

ミウラ大尉がやってくる。

ミウラ大尉 ボス、何か？

カール中佐 困ったことになったようだ。

ミウラ大尉 どうしたんですか。

カール中佐 先週、キャラウェイ夫人が今夜のケイトのバー
ステープレゼントを送って寄こしたのを知っているね。

ミウラ大尉 もちろんです。私が飛行場で受け取って来まし
たから。たしか、中国原産の狽という犬でした
ね。その犬がどうかしたんですか。

カール中佐 昨日から、行方知れずなのだ。

ミウラ大尉 ええっ、それは大変だ。ケイトは、さぞ悲しん
でいるでしょうね。

カール中佐 いや、妻は悲しんではおらん。悲しんでいるの
は、夢子だ。

ミウラ大尉 えっ？（と中佐を見る）

カール中佐 （うなづく）

ミウラ大尉 と、言うど？

カール中佐 （咳払いをし）これには、少し込み入っ
たわけがある。順を追って説明しよう、
トム。

夢子の部屋。

舞台右側の照明が落ち、変わって左側に

薄暗い照明。

中央にベッド。

夢子がベッドの端に座っている。

カール中佐がやってくる。

カール中佐 夢子。どうしたんだ。灯りも点けないで。

夢子 タローが、タローが（と立ち上がって、

中佐に抱きついて泣きじゃくる）

カール中佐 タローが、どうした、夢子。泣いてい

てはわからないぞ。

夢子 タローが、いなくなったのよ。

カール中佐 いつのことだ。

夢子 ついさつき。夕方。あなたにおはぎを

ミウラ大尉 ええっ、それは大変だ。ケイトは、さぞ悲しん

でいるでしょうね。

カール中佐 いや、妻は悲しんではおらん。悲しんでいるの

は、夢子だ。

ミウラ大尉 えっ？（と中佐を見る）

カール中佐 （うなづく）

ミウラ大尉 と、言うと？

カール中佐 （咳払いをし）これには、少し込み入っ

たわけがある。順を追って説明しよう、

トム。

夢子の部屋。

舞台右側の照明が落ち、変わって左側に薄暗い照明。

中央にベッド。

夢子がベッドの端に座っている。

カール中佐がやってくる。

カール中佐 夢子。どうしたんだ。灯りも点けないで。

夢子 タローが、タローが（と立ち上がって、

中佐に抱きついて泣きじゃくる）

カール中佐 タローが、どうした、夢子。泣いてい

てはわからないぞ。

夢子 タローが、いなくなったのよ。

カール中佐 いつのことだ。

夢子 ついさつき。夕方。あなたにおはぎを

作ってあげようと思って、材料を買いに街へ出かけたの、その時、裏の戸を閉め忘れてしまったのよ。

カール中佐 買い物なら栄子をやればよかったじゃないか。そのために雇っているんだから。

夢子 今日、栄子、急に休んだのよ。それにおはぎは、小豆もち米も自分で選んで、それから心を込めて作らないと美味しくできないの。

カール中佐 そうだったな。それでタローは探してはみたのか。

夢子 （首を横に振って）留守の間に戻って来たらと思って。帰り道がわからくな

カール中佐　　つたのよ、あの子。私が悪いのよ、私が
そんなに自分を責めるもんじゃ
ない。うっかりすることは、誰
にでもあることだ。

夢子　　今から探しに行こうかしら（と行きかける）

カール中佐　　待て、夢子。もう外は暗い。

夢子　　でも………。

カール中佐　　明日まで待ちなさい。明日、栄
子に探させるといい。

夢子　　タロー！

カール中佐　　大丈夫だ。きっと見つかるよ。

夢子　　どこへ行ったの、タロー！

3

宮古民政府長執務室。

舞台左側の照明が落ち、右側に照明が戻る。

デスクを挟んでミウラ大尉とカール中佐。

すなわち、場面1の続き。

カール中佐　　タローが着いた日に、そのまま官舎に

連れ帰ればよかったのだが、珍しい犬

だったので夢子に見せたのが間違いだった。

ミウラ大尉　　たしかに狎は珍しい犬種ですね。

カール中佐　　島内には二匹とおらんだろうな。沖繩

本島にもそうはいるまい。

ミウラ大尉 いえ、公設市場にいます。

カール中佐 公設市場に？

ミウラ大尉 ええ。ポーポー売りの女性が同じやつを飼っています。

カール中佐 ポーポー？ 何だね、それは。

ミウラ大尉 ポーポーというのは、つまり。

カール中佐 いや、今はいい。そのうちゆつくり聞こう。とにかく私は夢子にせがまれて、つい……。

ミウラ大尉 キャラウェイ夫人からケイトに贈ら

れたバスデープレゼントを、夢子嬢に贈ってしまった。そして、その犬、タローが昨日の夕方から行方不明。で

もボス、私には何の問題もないように思われますが。

カール中佐 君の言いたいことはわかるよ。タローのことをケイトに知らなければいいと言うんだろう？

ミウラ大尉 (うなづく)

カール中佐 たしかにそうだ。しかし、ことはそんなに単純じゃない。いや、単純じゃなくなつた。これを見てくれ、ついさつき受け取った電信だ。(と差し出す)

ミウラ大尉 (受け取り一読して) これは、どういうことですか。

カール中佐 それにある通りだ。一九六四年七月

十二日、つまり今から三日後の正午、高等弁務官ポール・キャラウェイ中將が視察のために夫人同伴でこの宮古に来島する。

ミウラ大尉　でも、今月末で沖縄を離れる中將が宮古に来るのは、まったく予定になかったのでは。

カール中佐　そうだ。さつさと本国へ帰還するはずだった。だから私は安心して夢子にタローをやったのだ。通常の視察だとは思うが、中將の気まぐれには最後まで振り回されっぱなしだ。

ミウラ大尉　当然、キャラウェイ夫人はタローのこ

カール中佐　とをケイトに訊ねるでしょうね。

カール中佐　そこなんだ、トム。私が困っているのは。島外から取り寄せるには時間がなしいし、部隊を動員して探させようかとも考えたが思い直した。

ミウラ大尉　同感です。犬一匹のために米国陸軍の兵を動かすわけにはいきませんからね。

カール中佐　それもあるが、へたに動いてすべてが中將の耳に入りでもしたら、かえって墓穴を掘ることになる。民政府内には、キャラウェイ將軍のスパイがうようよしているからな。

ミウラ大尉　たしかに。

カール中佐

考えただけでも息がつまりそうだよ、トム。プライドに軍服を着せたようなあの將軍のことだ。もし自分の妻の心尽くしを愛人に横流ししたと知ったら、私を絶対に許すまい。彼の両親とともに上院議員だった。政界にも顔がきく。あらゆる手段をこうじて、私の出世の妨害をはかるだろう。

ミウラ大尉

そこまですますかね。

カール中佐

君はあの笑い顔の奥に隠された、氷のような冷酷さを知らんだ。シャノン・マキューンを憶えているか？

ミウラ大尉

ええ。

カール中佐

鳴りもの入で登場したあの文官民政官でさえも、將軍の逆鱗に触れて任期中途中で本国へ逃げ帰った。沖繩の前は、マサチューセッツ工科大学の副学長だった男だぞ。三日後には、私も彼と同じ運命だ！

ミウラ大尉

落ち着いて下さい、ボス。

カール中佐

すまない、私としたことが。とにかく、三日のうちにタローが無事に戻ることを祈るだけだ。

ミウラ大尉

でも、戻ったとしても、これまでのことはケイトにどう説明するんですか。

カール中佐

私もそう思って考えたんだが、トム。

君が、飛行場で受け取って帰る途中で逃がしてしまったことにしてくれないか。

ミウラ大尉 それは、かまいませんが。

カール中佐 その上でこう言えば、ケイトは納得するだろう。余計な心配をかけたくなかったので黙っていたが、贈り主のキャラウェイ夫人が来島することに、急ぎよ探させることにした、と。

ミウラ大尉 わかりました。ところで、今夜のパーティーは予定通りでいいですか？

カール中佐 気が進まないがな。

ミウラ大尉 それでしたら、招待客を民政府内に限定して今回は地元関係者は省いたら

どうですか。

カール中佐 市長や警察署長か。

ミウラ大尉 ええ。

カール中佐 そうしよう。今夜は、彼らとの会話に興ずる気分じゃないだろうから。

ミウラ大尉 わかりました。さつそく連絡します。

(と去りかける)

カール中佐 (イスから立ち上がって) 待て、大尉。

ミウラ大尉 何か？

カール中佐 市長は外すが、署長は招待することにしよう。それも、特別招待だ。

ミウラ大尉 特別招待？

カール中佐 そうだ。今からすぐに君が直接警察署

に出向いて、私の言葉として再度招待するのだ。そしてトム、その場でタローの搜索を彼に依頼しろ。

ミウラ大尉 えっ、警察に。

カール中佐 どうだ、妙案だろう、トム。

ミウラ大尉 たしかに、彼らが動いたら見つかる可能性は大きいでしょうが。

カール中佐 その通りだ。ようやく光明が見えたぞ。

ミウラ大尉 しかし。

カール中佐 無理だというのか？

ミウラ大尉 少なくとも妙案とは言いかねます。これは、個人的な問題ですから。

カール中佐 ならば、個人的に署長に頼めばよい。

ミウラ大尉 中佐。

カール中佐 ミウラ大尉。これは命令だ！

ミウラ大尉 命令ならば、従います。

敬礼して、ミウラ大尉が去る。

4

公設市場。

ヨネがクバの扇を手にして、バークを前に座っている。そのそばに犬（狎）。

ヨネ （扇を振って）ハイ、そのの兄さん、

ポーポーどうねえ。美味しいかって？
アガイ、宮古一さあ。アメリカの上
等メリケン粉に多良間の黒砂糖どっさ
りだからね。(犬に) ねえー、昭ちゃん
兄さん、あんた、さつきから昭ちゃん
ばっかり見てるけど、そんなに珍しい
のかい？ だろうね。この子は、特別
だからね。売ってほしいって？ 馬鹿
なこと言うじゃないよ。どこの世界に、
わが子を金に換える母親がいるかね。
さあ、ポーポー買わないのなら、もう
帰った帰った。

淳栄がやってくる。

淳栄 おばさん、暑いね。

ヨネ 暑いね、まったく(と扇を使う)

淳栄 夏だね。

ヨネ 夏だね。夏だ、夏だ。ああ、うちは夏
が大嫌いさあ、もう。

淳栄 暑がりなんだ、おばさん。

ヨネ 別に、暑いのは平気だけどね。

淳栄 じゃあ、何が嫌いなもの？

ヨネ 何がって？ 余計な御世話だよ。

淳栄 自分で言い出しておいて、それはない
だろう。

ヨネ

ポーポー買いに来たんじゃないのかい。買わないんなら、帰っておくれよ。まったく、警察は何でもねほりはほり問い質すんだから。

淳栄

(笑って) 職業病かな。ひとつもらうよ、おばさん。

ヨネ

(新聞紙にポーポーを包む)

淳栄

それにしても、おばさんの口の悪さは相変わらずだね。

ヨネ

心(くくる)が綺麗な証拠さ。(とポーポーを差し出す)

淳栄

(金を払って受け取って) そんなもんか。そうよ。

ヨネ

淳栄

(ひと口食べて) うまい。おばさんのポーポーは、やっぱりうまい。

ヨネ

宮古一さあ。(親指立てて) ポーポー、グッド。

淳栄

(親指立てて) 何? それ。お客さんに教わったんだよ。アメリカ

ヨネ

カーの兵隊さんに、これやるといって。(親指立てて) ポーポー、グッド。

淳栄

それで、おばさんやってみたの? ああ、そしたらね、なんとこの間、バー

ヨネ

キごとそっくり買ってくれたんだよ。バーキごとか。それはすごいな。おば

淳栄

さんもうかったな。

ヨネ

でもアメリカカーといつても、日本人みたいだったよ、その兵隊さん。

淳栄

たぶんその人、二世だ。親が日本人だろう。

ヨネ

そうかね。優しい、人だったよ。

淳栄

じゃあ、またどんどん、ポーポー、グツドやらないと、おばさん。

ヨネ

アメリカ世（ゆー）だからね。そしたらまた、バーキごと買ってくれるかね。

淳栄

そうさ。あれらは、お金持ちだからな。去年の暮れに署長のお供で民政府のパーティーに行ったけど、大変なもんだったよ。

ヨネ

パーティー？

淳栄

宴会だよ。何かあるとしよつちゅうやってる。民政府長のカール中佐主催

のクリスマスパーティーだったけれど、宮古じゅうから集めてもこんなにはないだろうってくらい、食べ物や飲み物が溢れていたよ。うちの署長なんか、食べすぎて二日間便所通いだ。

ヨネ

うらやましいね。うちも一度でいいからのぞいてみたいよ。民政府長さんは、立派な方だったかい？

淳栄

太ってた。甘い物が好きらしい。

ヨネ

そうかい。でも、神様みたいでうちの

頭には、お姿は浮かびもしないよ。

淳栄 (笑って) 神様か。

ヨネ そうさあ。うちらみたいな下々の者か
らしたら、神様だよ。

淳栄 でもカール中佐は神様じゃないよ、お
ばさん。

ヨネ じゃあ、何にあたるかね。

淳栄 そうだな。神様のお使い、ってところかな。

ヨネ お使い？

淳栄 そう。神様は、ほかにいる。

ヨネ ほかに？

淳栄 ああ。高等弁務官ポール・キャラウエ
イ中將。その人が、今の沖縄の神だ。

ヨネ 天皇様、みたいなものかね。現人神。

淳栄 現人神か。おばさん、ずいぶん難しい
言葉を知ってるんだね。

ヨネ だって、前は天皇様のことをみんなそ
うお呼びしていたじゃないか。

淳栄 でも、天皇と違ってキャラウエイ中將
は、いつもニコニコ笑っているらしい
よ。百万ドルの笑顔。

ヨネ 百万ドルかい。ずいぶん(だいた)い
笑顔だね。

淳栄 そうだな。高い、高い。高すぎる。

ヨネ 今度の神様は、愛想があって優しい方
らしいね。

淳栄

どうだか。(新聞紙を差し出して) ちそうさん。

ヨネ

(受け取って) もうひとつどうね、刑事さん。おばさんがおごるよ。

淳栄

ありがとうございます。でも、遠慮しとくよ。それよりお婆さん、最近市場で何か変わったことはないか。

ヨネ

ある、ある。大事件。

淳栄

何！

ヨネ

ヤギ汁屋の亭主。

淳栄

ヤギ汁屋の？ (胸ポケットから手帳を取り出す)

ヨネ

ほら、赤(あか)犬(いん)の肉を混

淳栄

ぜてるんじゃないかって、前に噂のあった。

ああつ。はい、はい。(手帳を開いて鉛筆をなめる)

ヨネ

あの亭主、嫁と子供ふたり捨ててバーの若い女と八重山(やーま)に逃げたらしいよ。

淳栄

(手帳をしまつて) そうなんだ。

ヨネ

そう、そう。嫁はいいとしても、子供を捨てるのはうちには考えられないよ、いくら男親でもさ。

淳栄

まったくだ。そんな母親は鞭打ち百回、いや、千回のうえに子供に土下座して

謝らせるべきだ！

ヨネ おや、どうしたんだい、急に。

淳栄 え？

ヨネ 荒い声で。淳栄さんらしくもない。

淳栄 失礼。つい興奮してしまった。

ヨネ それに、八重山（やーま）に逃げたのは母親じゃないよ、父親。

淳栄 そうだったな。（と昭ちゃんを見て）
少し大きくなっただか。

ヨネ 抱いてあげてよ、昭ちゃんは淳栄さんが好きなんだから。

淳栄 （抱いて）おっ、やっぱり少し重くなっただか。よし、よし。

ヨネ うちの昭ちゃんと淳栄さんはそっくりだねえ。

淳栄 そうかな。（と昭ちゃんを見る）

ヨネ そうしているともまるで双子だよ。お目目がまん丸で、おちよぼ口で、耳がぴんと立って、鼻がぺっちゃんこで。

淳栄 ひどいな。

ヨネ おまけにポーポー好きだしね、二人とも。
そこへ、警官Aが急ぎ足でやってくる。

警官A （敬礼して）仲宗根刑事、緊急召集で

あります。

淳栄 緊急の。よし。（昭ちゃんを返して）

また来るよ、おばさん。

淳栄と警官Aが走り去る。

ヨネ
アメリカカーの上等メリケン粉と多良間の黒砂糖どっさりの甘いポーポーいらんかね。うちのポーポー、グッドよ。アメリカカーの兵隊さん、通らんかねえ。

5

宮古警察署。

上里課長がやってくる。反対側から淳栄が急ぎ足でやってくる。

上里課長 遅いぞ。

淳栄 申し訳ありません。事件ですか？

上里課長 民政府から捜索依頼だ。とにかく、この写真を見てくれ。(と差し出す)

淳栄 (受け取って見て) 昭ちゃん。

上里課長 いや、タローだ。飼い主の大杉夢子宅から昨日の午後五時頃、遁走したもようだ。

淳栄 大杉夢子。何者です？ 課長。

上里課長 民政府長のカール中佐が張水港(はりみずこう)の近くに囲っている

ハーニーだ。

淳栄 噂は聞いたことがあります。何でも、横浜から連れて来た美女らしいです

上里課長

ね。その女が何か事件を起こしたんですか。

そうじゃない。民政府がわれわれに依

頼してきたのは、犬のタローの捜索だ。

淳栄 タローの？

上里課長 そうだ。

淳栄 犬の？

上里課長 そうだ。

淳栄 それだけ？

上里課長 君もしつこいな、そうだ。それだけだ。

淳栄 失礼します。(と去りかける)

上里課長 待て。これは署長命令だ。

淳栄 署長命令？

上里課長 そうだ。三日のうちにタローを探し出

淳栄

せ。ほかの連中はもう出発した。

課長、市場でも遁走事件が発生したの

で、この件からは僕をはずして下さい。

上里課長 誰が、どこに逃げた。

淳栄 ヤギ汁屋の亭主です。バーの若い女と

八重山(やーま)に。

上里課長 きさま、からかうのか。

淳栄 ハーニーの犬を追いかけるより、こっ

ちのほうがよっぽどましですよ。

そこへ、豊村署長がやってくる。

豊村署長

君らは何をもめているんだ。

淳栄 署長。

上里課長 淳栄。

淳栄 宮古警察はいつから、カール中佐の太鼓持ちに成り下がったんですか。

豊村署長 (淳栄に) わしを愚弄するののか。

上里課長 淳栄、よせ、もう決まったことだ。

淳栄 でも課長。

豊村署長 カール中佐との信頼関係を深めることは、ひいては宮古圏域の安泰に繋がる。

そう判断してわしが決めたことだ。つべこべ言わず、君は三日以内にタローを探し出せばよい。

上里課長 署長、三日の期限付きというのは、ど

ういう事情でしょうか。

豊村署長 それは訊いたが、ミウラ大尉の返事はなかった。

上里課長 知られると都合の悪いことでもあるのでしょうか。

淳栄 あいつらはいつもそうだ。自分たちに都合の悪いことは隠そうとする。

上里課長 まったくだ。

豊村署長 上里。課長の君まで蒸し返してどうする。これは決定事項だぞ。

上里課長 失礼しました。

豊村署長 (上里課長に) 署員一丸となって、職務にまい進してくれたまえ。

上里課長

はっ。

豊村署長

わしは、これから民政府長主催のパーティーに出席せねばならん。こんな時に気が進まないが、これも職務だ。

(と去る)

淳栄

(豊村署長に) 食べすぎには、十分お気をつけて。

上里課長

署長は来年三月には停年だ。今さら民政府との間でごたごたを起こしたくないのだらう。さあ、タローを探しに行くぞ。

上里課長が去る。

淳栄

宮古警察は、もう死んだ。

淳栄が去る。

6

ヨネの家。

舞台中央に仏壇。その前に飯台。ヨネが仏壇の下の戸を開けて昭ちゃんを入れ、しめる。線香を点して手を合わせ、仏壇からポーポーの盛られた皿を取って飯台に置く。

ヨネ

昭ちゃん。

昭一 ハイ。

仏壇の下の戸が開いて（少年の）昭一が
顔を出す。

昭一 （仏壇から出て）お腹すいたよ、母ちゃん。

ヨネ 夕飯の時間、とつくにすぎちゃったか

らね。ほら、今日はたくさん売れ残っ

たから、ポーポーどっさりあるよ。

昭一 わーい。（とかぶりつく）

ヨネ そんなに急いだらむせるよ。

昭一 （咳き込む）

ヨネ ほら、もう。ゆっくり食べたら、昭ちゃ

ん。ポーポーは逃げたりしないから。

昭一 うん。でも美味しんだもん。母ちゃん、

のポーポー。（とまた咳き込む）

ヨネ まったく、しょうのない子だね。（背

中をさすりながら）淳栄さんも言っ

たけど、やっぱりお前、少し大きく

なったかね。

昭一 気のせいだよ。

ヨネ そうかい。

昭一 そうだよ。だって、ぼくもう、死ん

じやったから。

ヨネ あつ。そうだったね。（とうつぶく）

昭一 母ちゃん、そんなに悲しそうにしない

ヨネ　　でよ。ポーポーがまずくなっちゃうよ。
ごめんよ。

昭一　　うん。淳栄さん、さつきは事件で呼び
出されたのかな。

ヨネ　　どうして？

昭一　　お巡りさんが「仲宗根刑事、緊急招集
です」って言ってたじゃない。

ヨネ　　緊急招集って、何にかね？

昭一　　とつてもとつても大事なことで、急い
でみんなを呼び集めることだよ。

ヨネ　　ふうーん。

昭一　　怪人二十面相が現れたのかもしれない。
大金持ちの貴重な美術品が盗まれ

たんだよ。

ヨネ　　淳栄さんが、捕まえるかね。

昭一　　捕まえるのは、名探偵明智小五郎と少
年探偵団さ。母ちゃん、ポーポー、全
部食べていい？

ヨネ　　ああ。全部、お前のぶんだよ。

昭一　　うん。でも、怪人二十面相は脱獄の名
人だからね、すぐに逃げちゃうよ。

ヨネ　　じゃあ、捕まえても無駄だ。（と笑う）
それにしても、暑いね。（と扇を使う）
母ちゃん、夏が。

昭一　　嫌いなんでしょう。

ヨネ　　ああ、大嫌いだよ、夏は。戦争も。

昭一

怪人二十面相も暴力には反対なんだ。だから、ピストルもナイフも絶対に使わないよ。

ヨネ

戦争にも、反対なんだろうかね。

昭一

たぶんね。

ヨネ

じゃ、いい人なんだ。

昭一

世紀の大泥棒さ。美術館をつくるために、お金持ちから物を盗み出すんだ。

ヨネ

でも、いい人だよ、きつと。戦争に反対なんだから。

昭一

ぼくも戦争は大嫌い。だって、母ちゃんと離れ離れにされるからね。(大あくびをして) 眠くなっちゃった。

ヨネ

ポーポー、ほんとに全部食べちゃったんだね。

昭一

あっちでは食べたたくても食べられなくて、ずっと我慢していたからね。

もったいなくて残せないよ。お休み、

母ちゃん(と仏壇へ入りかける)

昭ちゃん。(と呼び止める)

何？

ヨネ

(昭一をじっと見て) ううん、何でも
ないよ。お休み。

昭一

お休み、母ちゃん。(と仏壇へ入り、
戸をしめる)

ヨネ、しばらく仏壇を見ている。

ヨネ

もう二十年になるんだね、昭一。お前は
何で、戻って来たんだい。母ちゃん
に言いたいことがあるんだろう。訊き
たいけど、怖くてどうしても訊けない
よ。お前は母ちゃんを恨んでいるんだ
ろうね。でもお前は優しい子だから、
恨みごとひとつ言わず母ちゃんの
ポーポーを美味しい、美味しいって食
べてくれる。昭一。（と仏壇に寄る）
あの夏、お前を連れて山奥へでもどこ
でも逃げるんだった。あんなに嫌がっ

ていたお前を台湾へなんか、やるん
じゃなかったよ。

7

国民学校長と訓導がやってくる。反対側

からヨネと昭一がやってくる。

国民学校長

（紙を広げて読み上げる）時局の現段

階に対処し一億国民総力を挙げて敵

反攻に備うる国土防衛態勢確立急務

なるとき人口疎開の一翼として県下

学童を安全地区に集団疎開させよと

の通達が発せられました。

ヨネ (訓導に) どういうことでしょうか。

うちの昭一が、何か悪いことでも？

訓導 いや、そうじゃない。お国から、国民

学校初等科第三学年より第六学年まで

の男児を安全な場所に移すようにとの

お達しが出たということだ。

ヨネ 安全な場所って、どこです？

訓導 九州か、台湾のどちらかだ。

ヨネ とんでもない。うちの昭一はすぐそこ

の池間島にも行ったことがないのに、

九州や台湾なんて遠すぎます。

国民学校長 疎開は単なる避難ではない。戦争完遂

のために、少国民といえども全力で協力しなければならんだ。

ヨネ でも………。

国民学校長 (直立不動で) これは、現人神の御命

である。(訓導に) よく説明して説得

するように。

国民学校長が去る。

ヨネ 現人神とは、どこの神様ですかね？

訓導 恐れ多くも、陛下のことだ。

ヨネ 陛下？

訓導 (声を低めて) 天皇様だ。

ヨネ

ああ、そうお呼びするんですか。

訓導

台湾に親戚がいるんでしたね？

ヨネ

はい。

訓導

だったら昭一君の疎開先は台湾がいい。

ヨネ

先生、うちは昭一をどこにも行かす気はありません。ずっと手元に置いておきたいです。

訓導

気持ちはわかるが、それはできない。

ヨネ

現人神様が、うちら親子を離れ離れにするように言ったんですか？

訓導

そうではない。

ヨネ

それじゃあ、何故？

訓導

もし米軍が上陸して来たら、こんな

ヨネ

ちつぽけな宮古島はひとたまりもない。それより、広い台湾のほうがはるかに安全だ。

訓導

宮古にもアメリカは来るんでしょか、先生。

それはわからん。しかし、すでにサイパンは敵の手に落ちたらしい。だとしたら、ここに米軍が襲来することは十分にある。

ヨネ

先生、でもうちは貧乏で息子を台湾までやるようなお金はありません。

訓導

それは心配無用だ。学童の食費や輸送費など、疎開に要する費用は県が一切

負担してくれることになっている。も
ちろん、教師も引率する。

ヨネ ほんとうに、大丈夫でしょうか。

訓導 お国のやることに、間違いはない。

ヨネ わかりました。(と頭を下げる)

訓導が去る。

昭一 母ちゃん、ぼく台湾へなんか行きたく

ないよ。お願いだからやらないでよ。

ヨネ 母ちゃんだってそうさ。やりたくない

よ。でも昭ちゃん、今は戦争なんだ、

しょうがないんだよ。

昭一 それでも嫌だ。ぼくは宮古に残る。

ヨネ (きつい口調で) わがママを言っじや

ないよ！ みんな行くんだから。

昭一 台湾へ行ったら、母ちゃんのポーポー

食べられなくなるから嫌だ。

ヨネ まったく、お前は強情だね。今の母ちゃ

んのポーポーは、砂糖が入ってなく

て美味しくないって、いつも文句を

言ってるくせに。

昭一 砂糖がないのは、戦争のせいだ。ぼく

は戦争は大嫌いだ。

ヨネ こら、昭一。そんなこと口が裂けても

言うもんじゃないよ。

昭一 ぼくはどこへも行きたくない。母ちゃ

んと一緒がいいんだ。

ヨネ 男の子でしょう、昭一。我慢しなさい。

昭一 (泣き声で) 嫌だよ、母ちゃん。

ヨネ アメリカが襲って来たらどうする

の。台湾へ行かなかつたら、母ちゃん
もう二度とポーポー作ってあげないか
らね。

昭一 (たつと走り去る)

ヨネ 昭一。(と追いかけて去る)

8

国民学校長と訓導がやってくる。反対側

からヨネがやってくる。

ヨネ 昭一に、何かあったのでしょうか？

訓導 たいへん、残念な報せです。昭一君が

マラリアに感染して亡くなりました。

ヨネ ええっ。

訓導 (深く頭を下げる)

国民学校長 お母さん、昭一君の死を悲しんではな

りません。昭一君は戦場の兵士と同じ

ようにお国のために立派に戦って

散ったのです。

国民学校長と訓導が去る。

ヨネ 昭一！（と泣き崩れる）

9

公設市場。

中央にヨネと警官B。ヨネは昭ちゃんを抱いている。

ヨネ アガイ。何回言ったらわかるかよ、こ

れはタローじゃないよ。昭ちゃんよ、

昭ちゃん。

警官B 嘘をつけ。

ヨネ 嘘なんかついていなよ、うちは。

警官B 犬が仏壇の下から出て来たというの

か。ひと月前に。

ヨネ そうよ。さつきからそう言ってるさ

あ。うちが戸を閉め忘れて出かけて、

帰って来たら入ったと。

警官B 誰がそんな作り話を信じるか。嘘をつ

くにしてももう少しましな嘘をつい

たらどうだ。それともからかっているのか。

ヨネ 許してよ、お巡りさん。

警官B だから正直に言わんか。その犬は、拾っ

たんだな。それとも盗んだのか。

ヨネ アガイー、もう。昭ちゃんは、ひと月

前に戻って来たよ、母ちゃんのところ。

そこへ、淳栄がやってくる。

淳栄 何かあったのか。

警官B 仲宗根刑事（と敬礼する）

淳栄 ご苦労さん。

警官B 民政府から捜索依頼のあった、タローを発見しました。

淳栄 どこだ？

警官B そこです。（と昭ちゃんを指差す）でも、自分のものだと言い張っております。出所を質したら妙なことを口走ったりするので、もしかしたら少しこれかも

しれません。（と頭の横で指をくるくる回す）

ヨネ 淳栄さん、助けて。昭ちゃんを連れて行かれるよ。

警官B （淳栄に）知り合いですか。

淳栄 僕が保証しよう。この狎はタローではない。昭ちゃんだ。

警官B そうですか。

敬礼して、警官Bが去る。

ヨネ ありがとう、淳栄さん。

淳栄 いや、こっちこそ。とんだ迷惑をかけ

てすいません。

ヨネ　いいんだよ。(昭ちゃんに) よかったね、
もう大丈夫。

そこへ、ミウラ大尉がやってくる。

ヨネ　(親指立ててミウラ大尉に) ポーポー、
グッド。

ミウラ大尉　(親指立てて) ポーポー、グッド。

ヨネ　(淳栄に) この間、バーキごと買って
くれた兵隊さんだよ。

淳栄　(ミウラ大尉に) 宮古署の仲宗根です。

ミウラ大尉　はじめまして(と右手を差し出す)

淳栄　(その手を握って) いえ、初対面では
ありませんよ。キャプテン、ミウラ。
ミウラ大尉　どこかで、会いましたか。

淳栄　カール中佐主催のクリスマスパー
ティーで一度。中佐は、部下のあなた
方から送られたイタリア製のタキシ
ードを着て御満悦でした。

ミウラ大尉　ああ、そうだった。思い出したよ。豊
村署長はあのあと、お腹を壊されて大
変だったらしいですね。

淳栄　食べ慣れない物を口したせいでしょう。
ミウラ大尉　ゆうべのパーティーでも、じつによく
召し上がっておられた。

ヨネ

何だい。二人は知り合いだったの。

淳栄

(ミウラ大尉に) おばさんのポーポーが好きで、よく立ち寄るんですよ。

ミウラ大尉

私もひと口食べただけで、すっかり

淳栄

ポーポーファンになってしまいました。

淳栄

バーキごと買い占めたらしいですね。

ミウラ大尉

バーキ？

淳栄

あのかごです。(とバーキを指さす)

ミウラ大尉

きょうもそのつもりです。

ヨネ

ポーポー、グッド、グッド。

淳栄

そんなにたくさん食べきれるんですか。

ミウラ大尉

ひとりでは無理ですよ。ほかの連中にも分けてやるんです。

ヨネ

さあ、二人とも食べて(とポーポーを差しだす)

淳栄

(ひと口食べて美味しそうになずく)

ミウラ大尉

このポーポーは、国の母の焼くホットケーキに似ています。だから好きです。

ヨネ

うちのポーポーは、アメリカの上等メリケン粉で作ってあるからね。

淳栄

でも、ホットケーキの甘味は、たしかシロップ。このポーポーのは。

ヨネ

多良間の黒砂糖。

ミウラ大尉

もちろん味はまったく別物です。でも、どこかに共通点がある。口ではうまく説明できないのですが、たしかに。

淳栄

不思議とこのひと月僕も、お婆さんのポーポーを食べると、六歳の時に死に別れた母がよく作ってくれたぜんざいの味を思い出すんですよ。母のことは思い出したくもないのに、何故か。三日口しないと、ついここに足を運んでいる。

ミウラ大尉

(手の中のポーポーを見て) これには、何か溶け込んでいる。ミラクル。

淳栄

(ヨネに) ひと月前から、何かまぜてる？

ヨネ

うちは何も。ひよっとすると怪人二十面相が、知らない間に惚れ薬でも入れているんだろうかね。

淳栄

媚薬か。面白い。でも僕が会いたくな

ヨネ

るのは、このポーポー。お婆さんじゃない。それは残念。変わらないよ。この子のために作りはじめて、ずっと続けているだけさ。

ミウラ大尉

犬のために？

淳栄

いえ、そうではありません。戦時中に疎開先の台湾で亡くなった息子の昭一君のことですよ。彼女にとつては、

ヨネ

その犬は昭一君の生まれ変わりなんです。そうじゃないよ、淳栄さん。これはほんとうの昭ちゃんだよ。

淳栄

そうだったね。

ミウラ大尉

ところで、依頼した件に進展は

ありましたか。

淳栄 今のところは、目撃情報も上がって来ていません。

ミウラ大尉 そうですか。

淳栄 大尉、その件に関して聞きたいことがあるのですが、いいですか。

ヨネ 淳栄さん、名探偵明智小五郎みたい。

淳栄 ちよっと待って、おばさん。

ミウラ大尉 (淳栄に) 何でしょうか。

淳栄 民政府の真意と三日間、明後日までの期限の意味についてです。

ミウラ大尉 と言うと？

淳栄 はじめは馬鹿げた依頼だと思ったので

ですが、だんだんそうではないような気がしてきました。

ミウラ大尉 言いたいことがよくわからない。

淳栄 あなた方は、われわれにいったい何を隠しているんですか？

ミウラ大尉 その質問には答えられない。

淳栄 やはり、そうですか。

ミウラ大尉 残念ながら。

淳栄 軍事機密ですか。

ミウラ大尉 ノーコメントだ。

淳栄 大杉夢子とタローがその機密に関わっているのではないですか。

ミウラ大尉 それはあなたの妄想にすぎない。

淳栄 そうでしょうか。

ミウラ大尉 そうだ。

淳栄 明後日、キャラウェイ高等弁務官が来

島するそうですね。しかも、予定外に。

ヨネ 現人神様が。

ミウラ大尉 どこからその情報を得た。

淳栄 われわれにだって、そのくらいの能力

はありますよ。

ミウラ大尉 (無言で淳栄を見る)

淳栄 やっぱりただの犬探しじゃないよだ。

ヨネ おやおや、どうしたの二人とも。(ポー

ポーを差し出して) さあ、もうひとつ

ずつ食べて仲直りしておくれ。

10

宮古民政府長執務室。

カール中佐がデスクについている。ミウ

ラ大尉がバーキを持ってやってくる。

カール中佐 何だね、その汚らしいバスケットは。

ミウラ大尉 (バーキをデスクに置いて) これは

バーキで、盛られているのはポーポー

です。興味がおありのようだったの

で、現物をお持ちしました。

カール中佐 そんな物より、私が今興味があるのは

タローのことだ。どうなっている。

ミウラ大尉 今のところは、目撃情報もないようです。

カール中佐 キャラウェイ夫妻が飛行機のタラッ

プに現れる前にトム、何としてもケイ

トにタローを抱かせるのだ。(ポー

ポーを手に取ってしげしげとながめ、

鼻に近づけて) 粘土のようなにおい

だ。

ミウラ大尉 味は悪くないですよ。食べてみて下さ

い。甘党のボスは、気に入ると思います。

カール中佐 (ひと口食べて) 何だ、このねばつく

ような甘味は。

ミウラ大尉 多良間の黒砂糖です。

カール中佐 中將にでも食わせる。(と残りをバーキに戻す)

ミウラ大尉 お口に合いませんか。

カール中佐 まったくだ。こんな物のどこがうまい。

(と手でバーキを払うようにする)

ミウラ大尉 失礼しました。(と手をのばす)

カール中佐 待て(とバーキを押える)

ミウラ大尉 食べるんですか？

カール中佐 トム、今ふと思い出したんだが、その

市場の女性が、たしか、タローと同じ

犬を飼っていると言っていたな、君は。

ミウラ大尉 昭ちゃん。タローとそっくりの狎です。

カール中佐 それだ。トム、もし明後日の正午にタ

ローが間に合わない時は、その……。

ミウラ大尉 昭ちゃん。

カール中佐 昭ちゃんをケイトに抱かせよう。これからすぐにその女性の所に出向いてくれ。

ミウラ大尉 どうするんですか。

カール中佐 借り受けるのだ。

ミウラ大尉 女性が断ったら？

カール中佐 断ると思うかね、われわれの頼みを。

ミウラ大尉 あるいは。

カール中佐 何故、そう思う。

ミウラ大尉 彼女は昭ちゃんを息子のように思っ

ているんです。仮に、金を払ったとし

ても断るかも知れません。

カール中佐 説得する方法はないのかね。

ミウラ大尉 宮古署に彼女と親しい刑事がいます。

彼の頼みなら、あるいは。

カール中佐 よし、その男を抱き込め。もし断るよ

うなら署長に圧力をかけさせろ。

ミウラ大尉 それよりボス、こちらの内情を正直に

打ち明けるほうが得策かと思えます。

彼は知りたがっていましたから。

カール中佐 (しばらく考えてから) 仕方がない。

時間もないことだし、いいだろう。

ミウラ大尉 誠意をもって話せば、彼はきつと力に

なってくれると思います。

カール中佐 そう願いたいところだ。

ミウラ大尉 (バーキを持って去りかけて) しかし、

ボス。昭ちゃんをタローの身代わりに

するとしたら、ケイトには説明しなければなりませんね。そのことを。

カール中佐 ケイトには、あとで私から話そう。

ミウラ大尉 その時は、お願いします。

カール中佐 うむ。

ミウラ大尉が去る。

11

ヨネの家。

飯台を挟んで、昭ちゃんを抱いたヨネと

淳栄が座っている。

ヨネ

民政府長のハーニーさんのタローとうちの昭ちゃんが瓜ふたつだなんて、何だか、恐れ多いね。

淳栄

おばさん、お願いします。

ヨネ

困ったねえ。うちはひと時も昭ちゃんを手放したくないんだけど。でも淳栄さんの頼みだし、困ったねえ。

淳栄

お願いします。(と頭を下げる)

ヨネ

そんなことせんで、淳栄さん。わかったよ。今夜ひと晩、考えてみていいかね。この子とも相談したいし。

淳栄

もちろんだよ。ありがとう、おばさん。(と頭を下げる)

ヨネ そんなことせんでって、言ってるでしよう。

淳栄 (昭ちゃんに) お願いします。

ヨネ それにしても人がいいね、淳栄さんは。

淳栄 そうかな。

ヨネ そうだよ。いくら頼まれたからといってもそこまではせんよ、普通は。

淳栄 はじめは僕も断ろうか思っていたんだ。でも、話を聞いているうちに、ミウラ大尉の苦しい立場もわかるなつて、思つて。

ヨネ 淳栄さんも、やっぱり宮古人だ。

淳栄 え？

ヨネ 情にもろい。

淳栄 (笑つて) そうかも知れない。じゃ、

おばさん、明日。(と立ち上がる)

ヨネ ポーポー上げたいけど、昭ちゃんが全部食べちゃって残ってないさ。

淳栄 ありがとう。

淳栄が去る。ヨネが仏壇の下に昭ちゃんを入れる。線香を点して手を合わせて飯台に戻る。

昭一 (仏壇の戸が開いて) ぼく、替え玉になるんだ？(と出てくる)

ヨネ

母ちゃん、まだ決めたわけじゃないよ。

昭一

替え玉作戦は、怪人二十面相の得意技なんだよ。

ヨネ

どうしようかねえ。

昭一

ぼく、替え玉になってもいいよ。

ヨネ

お前、あっさり言うんだね。

昭一

だって、飛行場で偉い人を出迎える間だけなんですよ。

ヨネ

そりゃあ、そうだけど。母ちゃん、心配なんだよ。

昭一

何がさ。

ヨネ

現人神様がまた、母ちゃんと昭ちゃんを離れ離れにするんじゃないかって。

昭一

そんなの母ちゃんの取り越し苦労さ。

ヨネ

そうだろうか。

昭一

そうさ。淳栄さんの頼みを聞いてあげようよ。ぼくもう寝るよ。(と仏壇へ

入って行く)

ヨネ

(仏壇をじっと見つめている)

12

民政府長執務室。

カール中佐が電話をしている。

カール中佐 奥様が？ もちろんです、閣下。私に

異存はありません。……失礼
します。(と電話を切る)

そこへ、ミウラ大尉がやってくる。

ミウラ大尉 キヤラウェイ夫妻を宿舎に案内して来
ました。

カール中佐 やれやれ。タローは間に合わなかった
が、何とかピンチを脱することができ
たよ。君のおかげだ、トム。

ミウラ大尉 仲宗根刑事が、飼い主の女性に頼み込
んでくれたからですよ。

カール中佐 私は君のような副官を持ったことを幸

運に思わなくてはなるまい。

ミウラ大尉 恐縮です。ボス、ケイトは今どこです
か。女性が待ちかねていると思うので、
これからすぐに昭ちゃんを引き取りに
行きたいのですが。

カール中佐 まあ、待て、大尉。

ミウラ大尉 何か？

カール中佐 実は、キヤラウェイ夫人が昭ちゃんを
すっかり気に入ってしまったって、譲って
ほしいと言いだしたのだ。

ミウラ大尉 ケイトにプレゼントしたはずじゃない
ですか。タローを。

カール中佐 そうなんだが、ケイトにはあとでパー

ルのネックレスを送って寄こすことになつたらしい。女二人で勝手に決めたことだ。私にはどうにもできない。それに中将からも今先、直に電話があつてね、承諾を求められた。

ミウラ大尉

昭ちゃんは飼い主に返さないということですか。

カール中佐

逆らえると思うか、相手は中将だぞ。

ミウラ大尉

お願いです中佐、何とか断つて下さい。

私は責任を持って昭ちゃんを返すと仲宗根刑事と約束したんです。私は、彼や女性の好意を裏切ることとはできません。

カール中佐

大丈夫だ、大尉。刑事のほうは、文句

ひとつ出ないように手を打つ。

ミウラ大尉

どういう意味です。

カール中佐

市場の女性に関しては君が、好物の

ポーポーを毎日でも買ってやればいいではないか。そうだ、トム。別の狨を探して与えよう。どうだ、それなら女性も異存はあるまい。

ミウラ大尉

中佐！

電話が鳴る。カール中佐が出る。

カール中佐 何！ タローが。（とミウラ大尉に目をやる）わかった。（と

受話器を置く)

ミウラ大尉 タローがどうしたんですか。

カール中佐 警察が、発見したらしい。

ミウラ大尉 それはよかった。中佐、昭ちゃん
んとタローを取り替えましょう。

カール中佐 それはできない。

ミウラ大尉 何故です？

カール中佐 昭ちゃんは今頃、ケイトが夫妻
のところへ届けているはずだ。

ミウラ大尉 そんな……。

カール中佐 もう手遅れなのだ。どうにもで
きない。

うなだれ、ミウラ大尉が去る。

カール中佐 (電話を取って) 豊村署長に用
事だ。警察につないでくれ。

飛行場。

舞台中央にフェンス。そばに淳栄とヨネ。

淳栄 おばさん、ごめん。(と頭を下げる)

ヨネ (首を振る)

淳栄 ほんとうに、ごめんなさい。

ヨネ

いいんだよ。淳栄さんのせいじゃないんだから。そう何度も謝らんで。

淳栄

いや、僕のせいだ。僕のせいでこんなことに。

ヨネ

そんなに自分を責めないで。うちが我慢すればいいんだから。我慢するしかないんだから。

淳栄

おばさん。

ヨネ

だって、現人神様の御命には誰も逆らえないよ。誰も。

遠くで、アメリカ合衆国国歌「星条旗」が聞える。

ヨネ

(フェンスの向こうに) ああ、昭ちゃん

んだ。昭ちゃんが抱かれて行く。昭ちゃん！

母ちゃん、ここだよ！

淳栄

ちくしょう。(とフェンスを叩く)

ヨネ

これからは現人神様と暮らすんだからね、お前は幸せ者だよ。

飛行機の離陸する音。

ヨネ

(両手を振って) さよなら、昭ちゃん。

ああ、でもやっぱり、嫌だ。またお前と別れるなんて、嫌だ。昭一、母ちゃん、夏は大嫌いだよ。(と泣き崩れる)

淳栄がヨネを抱き起こす。

そこへ、ミウラ大尉と夢子がやってくる。

夢子は狎を抱いている。

ヨネ

(ミウラ大尉に) うちが届けたポー

ポー、昭ちゃんに持たせてやってくれましたか。

ミウラ大尉

いえ。

ヨネ

そうですか。無理なお願いをして、ご

めんなさいね。(と頭を下げる)

淳栄が、ヨネの肩を抱いて去りかける。

ミウラ大尉

(淳栄に) 待ってくれ。私の話を聞いてくれ。

淳栄

今さら何ですか。裏切ったうえにあんな汚い手まで使っておいて。

ミウラ大尉

どういう意味だ。

淳栄

とぼけるつもりですか。

ミウラ大尉

とぼけてなどいない。

淳栄

僕はこれから署長に辞表を出すつもりです。でもご安心下さい。今回のタローの件に関しては、一切口外するつもりはありませんから。

ヨネ

(夢子の抱いている狎に) 昭ちゃん。

淳栄

おばさん、それは昭ちゃんじゃない。

タローだ。

ヨネ

違うよ。昭ちゃんだよ。

淳栄

昭ちゃんは今、飛行機に乗って行って

しまっただろう。

ヨネ

でも、昭ちゃんだよ。

淳栄

かわいそうに、おばさん。

ミウラ大尉

いえ、たしかに昭ちゃんです。

ヨネ

やっぱり。(と抱き取って頬ずりする)

昭ちゃん。

淳栄

(ミウラ大尉に) どういうことですか。

ミウラ大尉

(夢子を見て) 彼女のおかげで間一髪、

昭ちゃんとタローをすり替えることができ
ました。

夢子

(淳栄に) はじめまして。大杉夢子です。

淳栄

大杉夢子。あなたが。

夢子

はい。

ミウラ大尉

今朝早く彼女を訪ねてすべてを打ち明
けました。すると彼女は、昭ちゃんと
タローを取り替えることを納得してく
れたのです。そればかりか、協力を申
し出でてくれた。私に計画があったわ
けではないのですが、とにかくジープ
で彼女を飛行場へ連れて行きました。

夢子

私はタローを抱いて、男子トイレと女

淳栄 子トイレの間の用具室に隠れました。

夢子 トイレの用具室に？

淳栄 キャラウェイ夫人は、出発前に必ず用を足すと考えたのです。レディですからね。なるほど。

夢子 夫人が、タローを抱いたまま用を足すことはない。

淳栄 そうでしょうね。

ミウラ大尉 しかし、夫人は出発の時刻が迫ってもトイレへ行こうとしない。それで思い切って、夫人にトイレを勧めた。夫人は「サンキュー、トム」そう言っ、タローを私に預けてトイレへ入った。

夢子 ドアの間隙から差し込まれ昭ちゃんを受け取って私は、タローを渡した。もう、夢中でした。

ヨネ でも夢子さん、タローを手放してそれで、よかったのかい。

夢子 もちろん、タローと別れるのは辛かったです。でもタローは、もともと私のところに来るはずじゃなかったのです。なのに、私のわがままでみなさんに迷惑をかけてしまった。ヨネさんが喜んでくれているのを見て、やっぱりこれでもよかったと思っています。

淳栄 (夢子に) 民政府長のほうは、大丈夫

ですか。

夢子 私はうっかり屋で、また裏の戸を閉め忘れてしまいました。

ヨネ ありがとうございます、夢子さん。

夢子 礼を言いたいの私のほうです。おかげで、故郷へ帰る決心がついたのですから。うちは、何もしていないよ。

ヨネ 夢子さん。ポーポー、甘くてとっても美味しかったですよ。ミウラさんにいただきました。

ミウラ大尉 とっさにひらめいて、ヨネさんから預っていたポーポーを夢子さんに食べてもらったんです。

夢子 ヨネさんのポーポーを食べたら何故か、故郷の母のおはぎを思い出したんですよ。それで私は、ミウラさんの説得に応じる気になったのかも知れませんが。ヨネさん。

ヨネ 何だい。

夢子 私は十代の頃、母に反発して家出同然で故郷の福島を離れて、ずっと連絡もしていないんです。

ヨネ 母ちゃんは、夢子さんのことをとても心配しているよ、きつと。

夢子 ヨネさんのポーポーを食べながら、まぶたの奥に、私のために一生懸命おは

ヨネ ぎを作る母の姿が浮かびました。母ちゃんのおはぎは、美味しかっただろう。

夢子 ええ、涙が出るほど。

ヨネ 夢子さん。

夢子 はい。

ヨネ それにはね、子を思う母ちゃん（胸に手をあて）心（くくる）が、込められていたんだよ。

夢子 心（くくる）？

ミウラ大尉 心（くくる）？

淳栄 心（こころ）。ハート。もしかすると、おばさんのポーポーを食べて僕が感じ

るものは、それかも知れない。子を思う、母ちゃんの心（くくる）。

ミウラ大尉 ミラクルなポーポーのなぞは、ハートだったのか。

淳栄 そうだと信じたい、僕は。母のぜんざいにも僕を思う心（くくる）があったんだ。（ヨネに）母は、僕が子供の頃に死んだ。

ヨネ 六歳の時だったね。

淳栄 実は、母はその一年前に父と僕を残して家を出ていたんだ。ほかの男の人と暮らしていたらしい。僕はそんな母を憎んでいた。許せなかったんだ、どう

しても。でも今僕は、ずっと胸にわだかまっていたものが、すっと溶けたよ
うな気がするよ。

ヨネ
淳栄さんの母ちゃん、きっと今頃、喜んで
いるだろうね。

淳栄
昭一君も、おばさんに感謝しているだ
ろう。心（くくる）のこもったポー
ポー、ありがとう、って。

ヨネ
ありがとう？……………。

淳栄
（うなずく）

ヨネ
ああ、昭一。母ちゃん、わかったよ。
お前が戻って来たわけが。（昭ちゃん
を高く抱き上げて）お前は母ちゃんに、

ありがとうって言いたいんだろう。

怒ってなんかいないよ、って言いた
いんだろう……………。うん、わか
たよ、わかった。だからもう、これか
らは、母ちゃんのこととは心配しなくて
いいからね。

そこへ、昭一がやってくる。ヨネから昭
ちゃんを抱き取って去る。

〈幕〉

主な参考文献

平良市史 第二巻通史編Ⅱ〈戦後編〉

「沖縄の帝王 高等弁務官」

(大田昌秀 朝日新聞社)